学びのたより

東海国語教育を学ぶ会
２０１５年６月６日
文責：ＪＵＮ

学校が共同体になるとは

１　やり方を揃えることで共同体にはなれない

学校が「学びの共同体」になるとは，具体的にどういう状態になることでしょうか。

学びの共同体の学校改革が佐藤学先生（学習院大学教授）によって提唱され実践に移されたのは今から１８年ほど前のことだったと思います。新潟県の小千谷小学校で開始された実践が茅ヶ崎市立浜之郷小学校によって明確なものとなり，いまや，日本国内はおろか，海外にも広がるという爆発的な普及を遂げています。わたしは，その渦中に身を置き，いくつもの学校に足を運びそれぞれの取り組みにかかわってきました。そうして，学校が学びの共同体になる意義を実感しました。学校教育にはさまざまな課題があり，それらのどの課題に対しても取り組むことが求められています。しかし，どの課題に取り組んだとしても，教師や子どもが共同体として学び合えない学校であってはならないのです。学校を学びの共同体にすることは，何よりも大切で欠かすことのできない学校改革の大黒柱なのです。公職を退いてから１２年間，外部助言者としていくつもの学校にかかわってきたわたしが得たのはその確信だったと思います。

人が共同体になるということは簡単なことではありません。表面的に合わせることが共同体ではないからです。一糸乱れぬ集団を生み出そうとすれば個を殺すしかありませんが，わたしたちが目指すのは一人ひとりが人間として尊重される共同体なのです。構成員すべてが人として育ち合う共同体なのです。そうでなければ民主主義社会における共同体とは言えないのです。そこに難しさがあります。佐藤学先生もおっしゃってみえますが，学びの共同体の学校改革を成功できるのはこの難しさを知っている人なのです。安易に，表面上つくり上げようとするのではなく，難しさを自覚しながら誠実に丁寧にしかしビジョンと信念をもってねばり強く取り組む人だけが成功させることができるのです。

わたしたちが進めている「学びの共同体」の学校改革で決して陥ってはならないことの一つが，やり方を揃えるということです。かつて日本のかなりの学校が行ってきたのはそのやり方を揃えるということだったのではないでしょうか。

どこの学校でもそうですが，一年の出発にあたり研究主題を決め，研究方法を決めます。その際，小学校の場合，教科を一つに絞る学校があります。よく「わたしの学校は算数の研究校なの」という言い方を耳にしますが，それは研究教科を算数科に絞っているということを表しています。しかしそれはまだよいほうです。その算数の授業のやり方まで統一する学校があるし，授業で子どもたちに使わせる話し方を話型として決めるなど，あれやこれや一つに定めてしまう学校がかなりあったのです。今もあるのかもしれません。なぜでしょうか。

確かに，やっていることが教師によって学級によってばらばらになることのデメリットはあります。一つの組織が，組織としての力を発揮しようとすれば，そこに，共通の目指すものがなくてはならないでしょうし，そのための協働は必要不可欠です。しかし，それは，個々の教師の発想と工夫を封じ込め，同じやり方にがんじがらめにすることではないはずです。やり方を揃えて取り組んできたこれまでの事例を見ると，どうも「組織としての力を発揮するため」という美名のもと安易に行われてきたきらいがあります。

安易に揃えることが生み出してしまったもの，それは意味の薄い形式性ではないでしょうか。どこの教室に行っても同じようなやり方で同じような言葉を使い，子どもたちも教師もまるでロボットのように操られている，極端に言えばそういうすがたになってしまうからです。さまざまな子どもの学びを保障する学校教育に必要なのは，子どものさまざまな考えや個性がきらきらと光り，そんな子ども同士がかかわり合い，つながり合って生き生きと育つすがたでしょう。そして，そんな子どものすがたを引き出せるのは，生き生きと子どもに向き合う教師にちがいありません。それを実質のない画一性に閉じ込めてしまえば，教師が生き生きできるわけがありません。

そのような学校においては，教師たちがみんなで揃えることに安住してきたようにも思えます。自分の判断で行えば責任はすべて自分に返ってきますが，みんなと同じことをしていればよくない状態が生まれたとしてもすべてが自分個人の責任になりません。つまり，みんなという傘の下にいる安気さに浸ってきたのではないでしょうか。もちろんそんなことは考えていないという人がほとんどだと思いますが，思っているか思っていないかは別にして結果的にそうなっているように思えます。それではよいものは生まれません。

安易なやり方に揃えれば，その学校の教育は形式的になり，表面的になり，子どもも教師もかたちだけの行動をとるようになり，子どもに学ぶ魅力が生まれなくなります。そういう学校は，表面上統一がとれているようで決して共同体になっているとは言えないのです。

２　理念が共有されなければ共同体にはなれない

安易に揃えることはよくないとは言っても，教師たちにこの学校でどんな教育をしたいかという共通意識がなければ共同体にはなれません。組織の構成員につながりがなければ当然その学校の教育は深まりません。

「共同体」ということばは「岩波国語辞典」には「血縁や地域やお互いの愛によって結びついている集団」と記されています。ですから「学びの共同体」は，こういう学校にしたいという理念によって結びついている集団だと言うことができます。もちろんその理念は単なるスローガンのようなものであってはなりません。理念は具体化されてこその理念です。

たとえば，わたしが提唱する「学び合う学び」には「すべての子どもの学びを保障する」という理念があります。その学校のすべての教師が，本気でこの理念に向き合う，そういう学校にしたい，それがわたしの学校へのかかわりのコンセプトです。

本気でこの理念に向き合ったら，それにはどういう方策が必要なのだろう，何をこそ大切にしなければならないのだろう，どういう授業の在り方を目指すべきなのだろうという考えが，一人ひとりの教師に生まれるでしょう。個々の教師にこのことへの思索が生まれないまま，学校内のだれかの指示

や考えによる「やり方」を一方的に与えられるのはよいことではありません。揃えること先にありきではないのです。大切なのは，一人ひとりの教師が本気になって考え取り組むことです。

とは言っても，学校の状況によっては，何よりも先にまず全教師で取り組む一つのやり方を導入することもあるように思います。それは安易に揃えることとどう違うのでしょうか。

２年前の９月，『時報・市町村教委』という教育誌に「『学び合う学び』で学校が変わる，子どもが変わる」というわたしの論考が掲載されました。その中に，「『学び合う学び』成立の条件」として①子どもが探究する学びにする　②聴くこと・つなぐことを大切にする　③グループの学びを軸にする　④わからなさと探究が学びの原点　⑤学び合う文化を育てる　⑥学校を「学びの共同体」にするの６点をあげました。この中に一つだけ「やり方」と思われるものがあります。それは「グループの学び」です。

ある中学校が「学びの共同体」を目指して学校づくりをスタートさせたときのことです。とにかくすべての教科でグループの学びを取り入れたのです。つまり，何よりも先にグループの学びというやり方を導入したのです。教科担任制の中学校なので教科ごとにころころ変わることを避けるとともに，グループを取り入れれば教師たちの理解が進むという学校長の「読み」があったのでしょう。

こういうこともあってよいのです。ただ，大切なのは，実施していくうちにそのやり方の奥にある理念に行き着くという「読み」を持ち，その「読み」通りになるための手立てを講じることです。

もちろん，立ち上げに際して，グループの学びをしなければいけないと持ち出さないことも考えられます。「すべての子どもの学びを保障する」という理念に徹底的に向き合うのです。そのようにした学校では，何度にも及ぶ授業研究をして，一斉授業だけではすべての子どもの学習は実現できないという結論に行き着き，そこからグループによる子どもの「学び合い」に全教師で取り組むことになったのです。

どちらのあり方でもよいのです。大切なのは，常に理念に照らして考えるということです。そうすれば，その理念実現のために，これだけはなんとしても取り入れる必要があるという「やり方」を，納得づくで取り入れていくことができるのです。

そこで，大切になるのが，教師たちによる「学び合い」の場と時間です。やり方を安易に揃えなくて，常に理念に照らして考えるからこそ，教師一人ひとりが孤立してはならないのです。子どもの学びと同じで，教師も他の教師とつながり，考えと考え，実践と実践を突き合わせ，擦り合わせなければなりません。そうすることによって，それぞれが自らの実践を持続・発展できるのです。「学びの共同体」の学校とは，一人の子どもも一人の教師も孤立させないよう努める学校です。

とにかく，理念に対する共通認識の乏しい学校では充実した教育活動を行うことは難しいでしょう。そういう意味では，すべての教師が，その理念がとても重要なことなのだという納得を得ているかどうかが鍵を握っているのではないでしょうか。

３　仕事結果に差が生まれない組織は共同体にはなれない

どれだけ一人ひとりの子どもの学びを対象に取り組んだとしても，すべての子どもが同じ学習結果にならないのと同じように，教師の授業も，教師の子どもに対する対応もさまざまな結果になって当然です。もし，どの教師の授業も同じようなものになっていたとしたら，それはやり方を揃えただけ

のものになっているにちがいありません。本気になって取り組めば「差」は必ず生まれるのです。人間の成せることなのですからそれは当然です。どんな職業でも，どんなスポーツにおいても，これは厳然とした事実です。

そこで大切なのはその「差」をどう考えるかということです。人間ですから，悦に入ることもあるでしょう。つい優越感に浸ってしまうこともあるかもしれません。落ち込むこともあるでしょう。というより，よい結果を出した人を妬ましく思うこともあるかもしれません。

本当の共同体は，こうした諸々の感情を超えたときに生まれるのです。何度やっても思うようにできない，どれだけ取り組んでもよい結果が出ない，その苦しみは味わった人にしかわからないものです。一人ひとりがその苦しみに耐えられる組織とはどういう組織なのでしょうか。

わたしは，子どもたちの学び合いに必要なこととして二つのことをいつも語ります。「わからない」と言えること，困っている人に「寄り添う」かかわりができることの二つです。この二つがそっくり教師間のかかわりにも言えます。苦しみを吐露できる同僚がいること，それは他者に寄り添える人が何人もいる組織なのです。

「差」が生まれ，その「差」による苦しみに寄り添い合う学校が共同体になれるのです。

４　違いを尊重し合えなければ共同体にはなれない

２０人いれば２０通りの個性がそこに存在しています。みんな違う存在なのです。そのような異なる個性を有する２０人なら２０人が一つの職場に集い共同体になろうとしたとき，もっとも大切なことは「違いを尊重する」ということです。

一週間も一緒にいればなんとなく「違い」に気づきます。それが一月，一年となれば，「違い」に対する思いはますます強くなるでしょう。そのとき，忘れてはならないのは，みんないっしょにならない，それが人間社会なのだという当たり前のことです。

「違い」は時として「違和感」となり，「拒絶感」「嫌悪感」となることがあります。そういうとき，ふと自分の心を客観的にながめると，自分で自分を絶対視して他者を批判的に見ていることに気づくことがあります。自分にも至らないところがたくさんあるにもかかわらず感情的になっていることに気づいて恥ずかしくなることがあります。もちろん，その他者の行為が了解できないこともあり，そのことをはっきりさせたほうがよい場合も生まれます。とにかく，どこまでは許容できるのか，どこからができないのか，違いは違いとして有しながら共存できるのか，できないのか，その見極めが大切です。共存できることなら自分には合わないことであってもそれはその人のやり方として尊重すればよいのです。自分はその人のようにしないとしても違っていることを認めることです。

もちろんもっとよいのは，「違い」から学べることです。学ぶということは，自分にはないものを他者から得るということです。そのためにはまず自分を絶対視しないことです。そして，「違い」を感じれば，その違いをじっくり見つめ考えてみることです。そのうち，自分に足りなかった何かが見えてくるかもしれません。自分だけの世界にいては，角度の違う見方ができないので気づくことができません。つまり「違い」があるから学びが生まれるのです。わたしたちは，職員室も，教室も，つまり学校全体を「違い」を尊重し合う共同体にしていく必要があるのです。

５　聴き合う論議ができなければ共同体にはなれない

違いを尊重するということは，違いを違いのまま認め合う，場合によっては許容し合うということですが，それは見て見ぬふりをすればよいということではありません。違いを尊重し合うということは，どう尊重するのかがはっきりしていなければいけないし，できればそれが伝え合えたらもっとよいのです。さらに違いから学ぶということになれば，互いの考えの擦り合わせが必要になり，そこから何を学ぶのかが登場してこなければなりません。つまり，互いの違いについて真摯に考え合う場が必要だということです。その際，もっとも大切なのは「聴き合う」論議をするということです。

「聴き合う」ということは，子どもたちの学びにおいてもっとも重要でもっとも基本的な学び方だとしてこれまで述べてきました。学ぶという行為は，自らの考えを主張するだけでなく他者の考えに耳を澄まし，他者の成す事実に目を凝らすという「受け容れ」が絶対的に必要です。それを「聴く」ということばで表しているのですが，「聴き合い」になれば，その「聴き方」が双方向になるのです。そういう論議こそが多くの人に恵みをもたらすことになるのです。

共同体には，その「聴き合う」雰囲気が充満しています。一部の論客が声高に持論をまくしたて，他の大勢が黙っている組織は共同体にはなれません。持論をきちんと述べることのできるような人が，どんな考えにも耳を傾け，そのなかに潜む良さを汲み取る聴き方をしてこそ，どの人も語ろう，聴いてもらおうという思いを抱く組織になることができるのです。

さきほど教員数２０人の学校を例にあげましたが，２０人いればどんなときでもすっと同じ考えになるということはありません。いえ，考えの異なり，微妙な違いは，当たり前のように発生します。その「違い」を尊重するということは前述しましたが，それをそのままにできない場合が必ず出てきます。そういうときに必要なのが話し合いではなく「聴き合い」なのです。

話し合いというと，自分の考えを話すことに気持ちが傾斜します。それに対して聴き合いというと，他者の考えを聴くことに意識がいきます。「聴く」ということは，他者がどう考えているかを知るだけで事足りるものではありません。その他者の考えと自らの考えを擦り合わせ思考し，いったいこのことはどう考えればよいのだろうと突き詰める，それが「聴く」という行為です。もっと言えば，他者の考えに触れることによって自分の考えをふるいにかける，そういう行為だと言ってよいでしょう。

聴き合った後，どちらの考えも尊重しましょうという場合もあれば，組織としてどう考えてどう動くかそれを決めなければいけない場合もあります。そういう場合は，じっくり聴き合い，最終的に落ち着くところを見つけることになるでしょう。そこで到達した事柄は，最初からこれで行くと与えられるものとは全く異なるものになっています。ですから，決まったことが組織として遂行されていくことになるのです。

学校が共同体になるとき，そこには良質の「聴き合い」が存在します。「聴き合い」のできる教師の集まりが「学びの共同体」なのです。

６　理念に向かう実践をしなければ共同体にはなれない

聴き合う論議の大切さについて述べました。しかし，論議だけで終わりにしてはだめなのです。論議したことが実践に移されて初めて，論議したことが生きるのです。

たとえば，すべての子どもの学びの保障は，教師対子ども全員という「一斉授業方式」だけでは実現できないので，グループの学びを取り入れることにしようと確認されたとしましょう。教師のなかには，これまでずっと「一斉授業方式」でやってきていて，はたしてグループで学習させるだけで子どもの学びが深まるのだろうかという疑問を抱いていた人がいたかもしれません。そういう人が，そうした確認後，積極的にグループの学びを取り入れるかどうかが決定的に大切です。

ある学校で耳にしたことですが，その学校にそういう教師がいたのだそうです。その教師が今はその学校におけるもっとも積極的なグループ学習推進者だと言うのです。その学校の校長に「何があったんですか？」と尋ねました。そうしたところ，その人は，初めは半信半疑だったそうです。けれども，グループの必要性について何人もの教師が語るのを聴いて，本当にそうなのか，やってみなければわからないと思ったのだそうです。それで，わからないところは同僚に尋ねてやってみることにしたというのです。そうしたところ，これまで教室の隅のほうでぼんやりしていた子どもが他の子どもに支えられて真剣に鉛筆を動かすすがたがみられるようになったのだそうです。ああ，わたし一人ではあの子のあの表情はつくれなかった，そう思ったとき，一斉授業方式の限界がはっきり自覚できたのだそうです。

この教師は，とても誠実で，子どものためにこれまでも懸命に頑張ってきた人だったのでしょう。自分が教師としてしっかり指導しなければという思いが一斉授業を精錬することだけに傾斜することになっていたのでしょう。もともとそういう熱意のある人だったから，グループになったとき生まれた子どものすがたをまっとうに受けとめることができたのでしょう。

学校が共同体になるとき，そこには，積極的な実践が存在します。論議ばかりしていて，誠実に実践されない学校は決して共同体になることはありません。口だけではだめなのです。やってみなければ何も生まれないのです。

そこでさらに必要なのは，その実践の交流が活発に行われているかどうかです。つまり，それぞれの教師の実践を見合う機会，参観して協議する機会が数多くあるかどうかです。

教師の専門性は経験によってしか深まりません。実践が教師を教師にするのです。しかし，実践するだけでもだめなのです。自らの実践をどれだけ振り返ったかが大切なのです。その振り返りにおいて，他者の存在が大きいのです。ひとは自分のことが見えません。「自分のことは自分がいちばんわかっている」と豪語する人ほど案外見えていないものです。それだけに，きちんと見えたことを語ってくれる他者が身近にいるようにしなければなりません。わたしが，「実践をしなければ共同体にはなれない」と言う「実践」とは，振り返りをし合うことも含めた実践だと考えてください。

学校が共同体になるとき，そこに，ここで述べたような六つの要素が存在しています。そういう方向が生まれている学校を訪問すると，わたしは必ず，それらの学校に共通する「空気」を感じます。しっとりと落ち着いたおだやかさ，それでいて何かが静かに動いている，そういう空気感です。

冒頭でも述べましたが，人が共同体になるということは簡単なことではありません。むしろかなり難しいことです。けれども，その難しさを自覚しながら，そういう学校を求め続けたいと思います。そういう学校こそが，これからの時代を生きる子どもたちにとって必要なものだからです。